

中国大学日本語専攻用の教科書における使役表現の扱いについて

—学習者の産出例との関連をめぐって—

北京外国語大学 劉賢

従来の学習者による使役の産出例に関する研究を俯瞰すれば、明らかに以下のような問題点がある。

(1) 文法的に正しくないと判定されやすい例だけに目を奪われ、「文法的には正確だが、母語話者の使用実態とずれている可能性がある」というようなものには目を瞑る傾向が示されてきた。

(2) 産出例の問題点を引き起こす原因を解明する上で対照分析や日本語学による知見への拘りが強いという傾向が見られてきた。

(3) 産出例をただ傍観的に分析する研究が多いのに対して、日本語教育への応用と貢献を考慮に入れる研究が少ない。

実際、学習者の本当の使用実態を把握し、日本語教育の改善に役立つ研究なら、当然、学習者の誤用例だけでなく、正用例と不自然な例も含めた中間言語の全体を見なければならない。また特に典型的な教室環境で日本語を学んでいる学習者の産出例の問題点を分析する場合、その原因を究明する上では、既存の日本語学や対照研究の成果を援用するだけでは不十分であり、日本語教育現場の事情（教科書における関連項目の扱いや教師の教え方などの妥当性）との関連も考慮に入れる必要があるように思われる。

本稿では太田（2011）による「学習者の産出例から運用のために必要な情報を考える」という知見に従って、学習者コーパス、母語話者コーパス、教科書という三つのデーターを総合的に洗い出すことで、現行の中国語の大学日本語専攻用の教科書における使役表現の扱いの一般的な傾向とその妥当性について考察を試みる。